

## 2021 ハイチ地震緊急救援

薬剤師 仲里 泰太郎

(派遣期間：2021年10月25日～12月12日)

ハイチ共和国では2021年8月14日にマグニチュード7.2の大地震が発生し、大きな被害が出ておりました。地震後、国際赤十字赤新月社連盟（IFRC）はフィンランド赤十字社を中心に、被害の大きかったレ・カイに病院型の緊急対応ユニット（病院 ERU）を展開しており、私は病院 ERU 第三班として派遣されました。



病院 ERU 全体図

第三班はフィンランド人を中心に、カナダ人、香港人、フランス人等多様な国籍で構成されており、日本からは薬剤師/メディカルロジスティクス（メドログ）要員としての私の他に、手術室担当の看護師さん2名の合計3名でした。まず私は前任者と現地で雇用した薬剤師から引継ぎを受けつつ、薬局全体の整理と全医薬品・医療消耗品の棚卸、それと並行して全品目にBINカードを付けて管理を容易にしました。到着から5日後に前任者が帰国し、現地薬剤師も4日間の休暇を取ったので一人で業務をこなすことになりましたが、最初にこの作業を行っていたおかげで特に業務に支障は出ませんでした。普段のルーチン業務としては、医療スタッフが薬局に持ってくる薬品・医療消耗品請求書に基づいた払い出し、各病棟・外来を回りながら不必要な医薬品の回収と麻薬・向精神薬の管理チェック等があります。これまで経験してきた診療所型の ERU とは違い、膨大な物品を扱いましたが特に困難な場面はありませんでした。



現地薬剤師と病棟で

私は当初 12 月 2 日まで派遣の予定で、私の後に日本からもう一人薬剤師が撤収班として来る予定でしたが、ハイチの治安悪化から要員の出入国を最低限に抑えたいということになり、チームリーダーから 1 週間の派遣延長を打診され、家族や病院と相談の結果延長することになりました。これにより撤収も私が行うことになりました。同じ時期にやはり治安状況の悪化から医療チームも当初の予定より早く帰国させることになり、医療チームを含む多数の派遣要員が帰国することになりました。私はこのような状況下だと、いつ病院 ERU クローズの時期が早まってもおかしくないと思い、現地薬剤師と協力して急ピッチで撤収準備を進めていくことにしました。11 月 3 週目から手術室や病棟が順次クローズしていったので、その都度今後使用しないと考えられる物品を寄付のために用意した大きなボックスに詰めていき、内容物を示したパッキングリスト（品目名・数量・期限が記載されているもの）を入れていきました。



パッキングされた医薬品

医薬品を陳列していた棚もどんどん畳んでいき、11月の3週目には薬局内はクローズ・医薬品/医療消耗品の寄付に向けてほぼスタンバイできている状態に仕上げました。

ここまでに経験した印象深い事例として、まず一つ目が要員の針刺し事故です。病院 ERU は 24/7 の状態で運営していますので、医師・看護師はオンコールで夜勤の対応を行います。その夜勤の時間帯に産科の医師が針刺しをしたということでややパニック状態になり宿舎に居た私に電話をかけてきました。ERU には PEP キット（暴露後予防キット）が配置されていますので、医師の直接のボスにあたるシニアメディカルオフィサーと相談して PEP キットの使用を電話で指示しました。二つ目は銃で撃たれた患者の対応です。これは早朝の出来事で、私も朝の 4 時に電話で起こされました。直接の対応はオンコール当番の医師・看護師でしたが、私は病院 ERU にどんな薬があって、それがどこにあるのかを麻酔科医に伝えるためにオペが終了するまで起きておいて欲しいということで対応しました。三つ目は白昼に病院のすぐ近くで 10 歳の男子がレイプされるという事件が発生し、この被害者へのケアの為 PSS（心のケア）要員が医師と一緒に薬局に来たので前述の PEP キットを使用し対応しました。

11 月の半ばに、先に帰国したフィンランド赤十字社の要員が帰国後、頭痛・発熱の症状により COVID-19PCR 検査を受けた結果、陽性となったことがハイチに残っていた要員に伝えられました。これを受けて要員と現地スタッフは COVID-19 抗原検査をそれぞれ行い、その結果私とハイチの医師が陽性となりました。私はすぐに防護キットを着用し、救急車で宿舎に戻りそこで 10 日間隔離されることになりました。10 日間の間、食事は仲の良かったフィンランドの医師が毎回持ってきてくれ、私の状態が急変した時のために毎日誰かが宿舎に残ってくれていました。この間薬局の仕事は現地薬剤師一人か、彼が休みの時は前述のフィンランドの医師が代行してくれおり、私は時々電話で業務に関する質問に答えたり、指示を出すことで対応していました。幸い私の症状は頭痛と嗅覚異常だけで収まり、10 日後には無事に業務に復帰することができました。ただ、もう一人の陽性であったハイチの医師は肺炎を起こして首都の病院に緊急入院していました。

業務復帰後、撤収に向けてまず国境なき医師団（MSF）のフランスチームにケタミンという麻薬を譲渡しました。譲渡書を作成し、MSF の宿舎兼医療倉庫へ現地薬剤師と一緒にいき、無事譲渡することができました。また、大半の医薬品と医療消耗品は現地の公共病院に寄付することになっていたのですが、その病院の保健省担当者と面会し、寄付物品の数量や期限、保存状態を確認してもらいました。



保健省担当者と

中には期限が切迫していた医薬品もあったのですが、確認の上受け取ってもらうことで合意しました。その後、医薬品・医療消耗品やその他非医療資機材を置く倉庫の選定にロジスティクス担当者とは出かけ、適した倉庫を選定しました。物品を薬局から運び出し、ラッピングをしたところで私は帰国の為首都に戻ることになり、残った倉庫への運搬は現地薬剤師に任せました。



医療倉庫への搬入の様子

首都に到着後、帰国前の PCR 検査を受け、ハイチ赤十字社本社を訪れて、COVID-19 の診療に使用する医薬品・医療機材をチームリーダーと共に寄付しました。

これから日赤も病院 ERU を主導で展開していくこととなりますが、その前に実際に病院 ERU で働き、更に撤収業務までできたことは私にとって大きな経験になりました。この経験を今後の日赤の ERU 活動に生かしていきたいと考えています。